

令和 7年 9月12日

令和6年度 特別の教育課程の実施状況等について

学校名	管理機関名	設置者の別
静岡大学教育学部附属浜松小学校	静岡大学	国立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

特別の教育課程の編成の方針等の公表 URL

<https://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/hamasho/%E6%95%99%E8%82%B2%E7%A0%94%E7%A9%B6/>

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

自己評価結果の公表 URL 及び学校関係者評価結果の公表 URL

<https://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/hamasho/%E6%95%99%E8%82%B2%E7%A0%94%E7%A9%B6/>

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※ (1) で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ・実施している
- ・実施していない

<特記事項>

4月に学校説明会を実施し、本校の教育活動、教育課程（特別の教育課程含む）に関する説明を実施し、教育課程全体を通して、「自己の在り方・生き方」を拓げ、深めること、基盤となる道徳性の育成することを伝えている。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本校の教育課程、学校教育目標「自己を磨き 他とともに よりよい未来を創造する子の育成」の具現化のために、教育研究と関連させ、小中一貫エージェンシーベイスカリキュラムを構築、実施することを通して、子どもが、教育課程全体で、「自己の在り方・生き方」を拡げ・深めることをめざしている。

本校では、エージェンシーを単に主体性と捉えるのではなく、「何をなすべきか」を考え、目的を問い合わせ、見いだした意味から、本質や周りの「ひと・もの・こと」との関係性をよりよく再構成するプロセスの中で発揮される力と捉えている。

そこで、本特例により、カリキュラムにおける領域間の横断・往還を活性化させられるような教育課程を編成していく。

(2) 特別の教育課程の実施に関わる評価

上記3-(1)の通り、教育研究と関連させ、新たに小中一貫エージェンシーベイスカリキュラムを構築、実施した。研究発表会(10月実施)での教育関係者からの事後アンケート、及び学校評価(11月実施、児童・保護者・本校教員が対象)を基に、本特例に関わる特別の教育課程について、以下の通り、評価する。

- ・「主体性」の捉えは多様であるが、本校の教育活動が子どもの主体性を大切に実践・実施されている点に、教育関係者、保護者から評価を得られている。
- ・本校の豊かな体験活動が、「かかわり」を大切に実施されている点に、保護者から評価を得られている。本校の捉えるエージェンシーを重視した実践に対し、児童の言葉を介して保護者に浸透していると考える。
- ・小中の教職員が、カリキュラムの理念を合意形成することを通して、小中の職員間の意思疎通が密になっていると認識する教員が多い。その中で、カリキュラムの理解が進んでいるが、その実施方法には、教科特性や発達段階によって差異が生じることが分かってきた。今後は、教科特性や発達段階を踏まえたカリキュラムの実施が必要となる。
- ・一方で、学校行事の充実に関する指摘が学校評価の中で、散見された。今後は、教科学習を超えた学びから、「自己の在り方・生き方」を拡げ・深めるカリキュラムの実施を後援する教育課程の編成が必要となる。

5. 課題の改善のための取組の方向性

3に記すような課題を踏まえて、教科教育を超えた教育課程全体で、小中一貫エージェンシーベイスカリキュラムを実施していくという方向で本特例の改善を図ることが必要と考えられる。そのために、教育研究とより関連を図り、道徳領域や特別活動領域、総合的な学習の時間領域での実践を積んでいくことが必要であると考える。